随筆

故郷・厚岸町

石川 憲生
いしかわ のりお

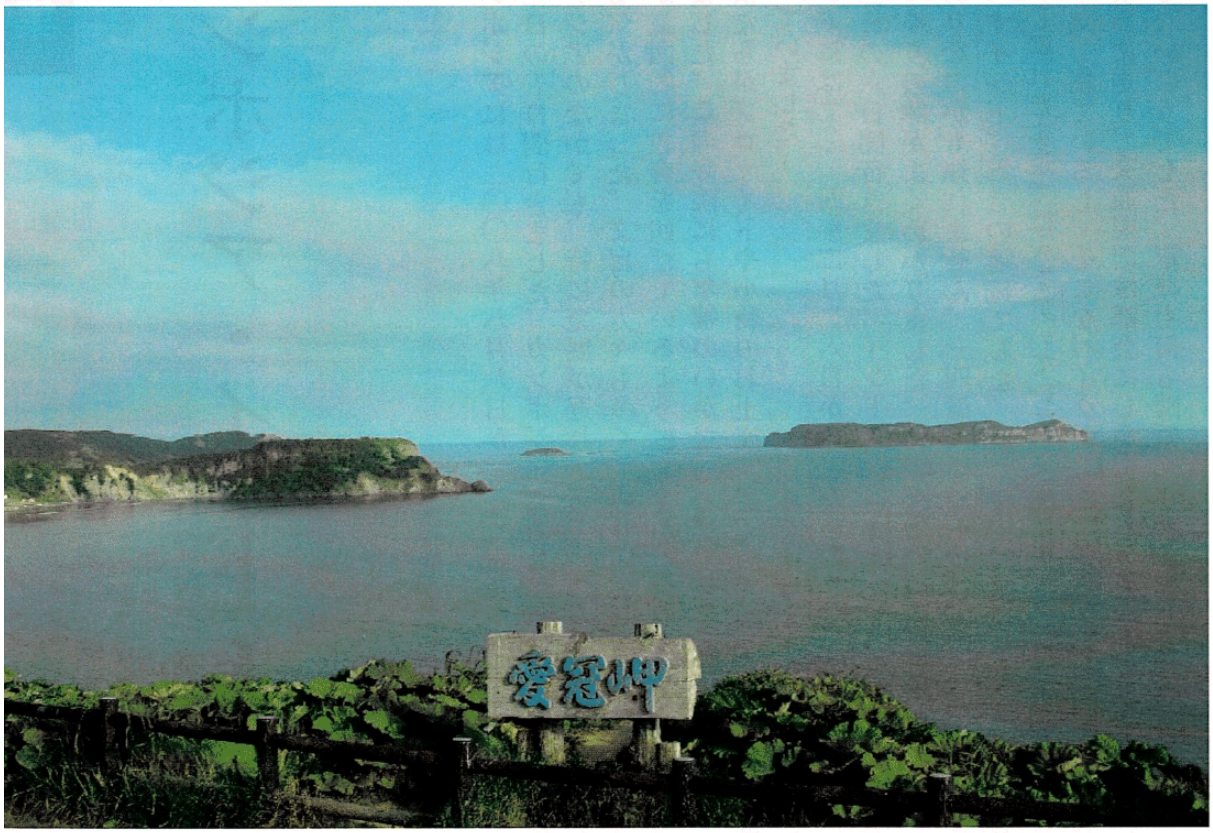
まさか自分が函館市で定年を迎えるとは思ってもみませんでした。わたしのふるさとは道東の厚岸町で、高校までの青春時代を過ごした町でした。漠然とこの町で生涯を送ると考えておりました。

札大経済学部に入学して、札幌という大都会で生活しているうち、世の中の大きな渦に自然に巻き込まれ、たぶん多くの人たちも同じだと勝手に考えていますが、自活できる生活を追っているうち、ふるさとは遠くになりました。道南の函館に住んで四〇数年、長年連れ添った女房と話をしていると、無事に過ごしたといえるのかも。

大学の正門を入ると左手にホップ園があり、初夏には待ち望んでいた太陽のひかりを新緑が絡めとるようで美しかった。大学ではいまでも付き合っている仲間たちと知り合ったが面白かったです。酒の味もここで知りました。ロシア語の連中はウオッカで鍛えられているのか、先生も含めて酒好きで、なにか理由を付けてはコンパばかり開いていました。この四年間にオイルショックがありましたが、西岡の不動産開発は勢いが止まらず、ジャガイモ畑、トウモロコシ畑がつぶされて新しい住宅がドンドン建てられ、ホップ園もテニスコートになってしまいました。時代の流れが感覚として肌にしみ込みます。こうなると大河の一滴、時間という水の勢いのなかで夫婦ともども浮力を保ちながら流れていきます。

そうして今があります。なんだかおかしなものです。新幹線が津軽海峡を渡って来ているのですからね。逆にわたし個人の時間がゆっくりとホームに到着です。地球を一周してふるさとに戻った鮭ですかね。なつかしいのでふるさとの事を書かせていただきます。

内地の皆さんは知らないと思いますが、『蝦夷三官寺』は当時のわたしたちが高校生のころ、歴史や地理の授業で暗記させられました。江戸幕府が東蝦夷地の警備など、蝦夷地政策の目的で、①胆振国有珠郡の善光寺 ②日高国様似郡の等澍寺 ③釧路国厚岸郡国泰寺の三寺で、史跡になっています。当時は千島列島に沿ってロシアの南下があり、現地に住んでいるアイヌ人へのロシア正教の布教に対する憂慮もあったようです。国泰寺はいまでも整備されて残っています。そして日本でシーズン最終の桜の花見の場所となっています。厚岸町の天候は、夏は霧に包まれる日が多く意外と寒い。冬は雪が少ないがやはり寒い。ただ食い物は海の幸に恵まれ、ほんとうに美味く、とくにゲタ牡蠣が有名



で岩手県の三陸海岸ものに負けません。

観光客のスポットは『愛冠岬』で、うつくしい入江を岬の高台から眺望できます。幸福駅や愛国駅と同じで、漢字の意味が愛され、それがブームになっています。愛の鐘が設置されていて、それを奏でることができますが、強風の海風が吹くと、驚くことにいくら頑張っても風の力で体が押し戻され、その鐘までたどり着けません。ひとりで来ると恐怖を感じます。ここには北大理学部付属厚岸臨海研究所もあります。また『あやめヶ原』があり、いちめんあやめの原生園で、野生の馬が放し飼いになっています。霧に包まれるとすごく幻想的なところです。あのあやめの紫色が白い霧の中に何万本も漂うのです。

ただ最近気になるのは、やはり人口の減少です。昨年ついに一万人を切りました。またなつかしの厚岸駅にたたずむと、このきれいな名前の花咲線（根室本線）が消滅する危険がささやかれている事です。厚岸と函館、北海道の海の里山が末永く生き残ることを願うのみです。

昔の仲間たちと大通り公園のテレビ塔の真下で再会するのを楽しみに、この創刊号に小文をおくります。